

# エジプト「ポップス」革命

中町信孝 なかまちのぶたか / 甲南大学

ムバラク独裁政権を倒した「エジプト革命」は、音楽の革命でもあった。

あれから2年、新しい国づくりへの模索が続くカイロでは、

今も新しい音楽が続々と生まれている。

高級ショッピングモール内のCDショップを見ると、カイロキーのアルバムが売り上げランキングの1位と3位とを占めていた。彼らはインディーズからメジャーシーンへと見事の上りつめたのだが、CDを買えないより貧しい層の若者たちには、どのくらい彼らの声が届いているのだろうか。



今も時折タハリール広場付近の道路が封鎖されるため、カイロ市内の渋滞は数年前よりいっそう酷い状態になっていた。交通標識かと思って見上げると、「エジプトが第一、いつも」という政府のスローガンが掲げられていた。



## 革命のテーマソング

3年ぶりに訪れたカイロ、新市街のナスル・シティーからタクシーに乗り込むと、カーステレオから流れる大音量に迎えられた。強いエフェクトの効いたボーカルはテクノ音楽のようだが、伴奏は伝統打楽器を用いた大衆歌謡そのものである。「マハラガンかい?」と、20代半ばとおぼしき運転手に尋ねると「アイワ（そのとおり）!」との答えが返ってきた。マハラガン、アラビア語エジプト方言で「祝祭」を意味する名を持つ新しいジャンルの音楽が、今エジプトの若者の間でブームを巻き起こしているという話は聞いていた。いざカイロに到着して街を見回すと、通りを走るタクシーやトゥクトゥク（三輪タクシー）の多くから、このマハラガンのお祭り騒ぎのような爆音が漏れ聞こえてくる。これも、革命後エジプトの新しい音楽潮流のひとつなのだろうか。

2011年1月25日、社会変革を求める若者たちがタハリール広場に集まり、ムバラク大統領の退陣を求めて座り込みを開始した。警官隊との衝突を繰り返しながらもデモ隊は勢力を増し、エジプト全土で100万人を超える人びとがデモに参加したと言われる。そして18日後、ついにムバラクは辞任を発表し、30年にわたる独裁体制にピリオドが打たれた。これがいわゆる「エジプト革命（現地の呼称では「1月25日革命」）」であり、読者諸氏にとっても記憶に新しいことだろう。

この革命のさなか、さまざまなミュージシャンが現れて、彼らの主張を音楽にのせて歌いあげた。広場に集った若者たちは彼らの楽曲に耳を傾け、ともに歌い、これら革命のテーマソングとともに革命を成功に導いたのである。広場の若者たちを代表するミュージシャンとして、まず頭角を現したのは

ラーミー・エサームである。デモの初日からギター持参で広場に現れ、群衆の真ん中に立って歌う彼を映した映像が、当時ユーチューブのサイトに挙げられ、彼は一躍革命のスターとなった(youtube.com/watch?v=gPhj5XnPjaU)。また、早くから革命に賛同していたミュージシャンとしてはもう一人、ラッパーのラーミー・ドンジュワンがいる。アレキサンドリアに住む彼はタハリール広場にかけてつけこそしなかったものの、「俺は反政府」と題する自作のラップをこれまたユーチューブで公開し、ムバラク体制を強烈に皮肉った(youtube.com/watch?v=Uwai6oTAcMM)。

エサームの弾き語りロックとドンジュワンのヒップホップ、音楽ジャンルは異なるが、両者に共通するのは「1人で作れる低予算音楽」ということであろう。ギター1本、パソコン1台あればできる音楽に強烈なメツ



カイロ旧市街観光の目玉、フィシャーウィー・カフェ。以前に比べると外国人観光客の姿は少なく、売り子たちが血眼になって客引きをしている姿が印象に残った。

セージを乗せて、政府の検閲を経ることなくウェブ上にアップロードすることで、彼らのような無名歌手が直接世界に発信することができたのである。

そういえば、先に紹介したタクシー運転手は、カーステレオにUSBメモリストティックを差していた。聞けば、インターネット上の音楽サイトからマハラガーンの楽曲を大量にダウンロードして聴いているのだという。かつてであれば、街角のカセット屋に注文して好みの楽曲の自家製

コンピレーション（「カクテル」という）を作ってもらい、それをカーステレオで繰り返し聴くのがタクシー運転手たちの常であったが、そもそもマハラガーンの歌手たちはカセットもCDも出していない。ここ数年で、インターネットが若者のライフスタイルを変えた様子がかげがえるが、これは同時に、フリーのミュージシャンたちにとって直接リスナーに楽曲を提供する機会ができたことも意味していたのである。

#### 体制を支えてきた人気歌手

そもそもエジプトは、人気歌手を数多く輩出する芸能大国である。エジプト人歌手たちの歌声は世代を越え、さらには方言の壁を越えてアラブ圏に行き渡り、彼らの社会的影響力はきわめて強い。特にこの10年ほど、彼らはパレスチナへの支持を表明するアラブ主義的な楽曲や、国内の団結を訴える愛国ソングをことあるごとに発表してきた。ムバラク政権はこれらの歌謡曲については、政権への批判におよばない限りは寛容

な姿勢を示しており、むしろ歌手たちの人気を利用して、国内の不満を外に向けたり、あるいは自分への支持を取り付けたりするように仕向けていた節がある。今回の革命でも当初から、大物歌手のアムル・ディヤーブがムバラクを支持する官製デモに姿を現したとか、若手人気歌手のターメル・ホスニーがデモを終わらせるようテレビで訴えたなど、スターたちの体制寄り姿勢が目についた。

そんな中、大衆歌謡の大物歌手シャアバーン・アブドゥッラヒームは、「25日のタハリール広場」と題する曲を2月6日に発表した。日頃歯に衣着せぬ物言いで人気を誇るこの庶民派歌手は、革命のリーダーと目されていた元国際原子力機関事務局長エルバラダイ氏や、センセーショナルな映像ばかりを放映するカタルの衛星放送局アルジャジーラなどに対して辛辣な言葉を投げかけながら、デモを早く終わらせるよう主張した。

さらに、やや時代がかったラブソングで知られるベテラン歌手イハーブ・タウフィークは、その名も「エジプト人よ、さあ帰ろう」という歌を発表した。当時、国営放送で流れたというこの曲のビデオクリップには、デモ隊の若者が路上の車に火を付ける画像などとともに、従来の愛国ソングで使われていた「母なるエジプト」のイメージ映像——緑豊かなナイル河畔の景色、子どもたちの学習風景、さまざまな産業に従事する労働者の姿——が重ね合わされていた。こんな美しいエジプトを守るためにも、若者たちは一刻も早くデモをやめて家に帰るべきである！この曲は明らかにそんなメッセージを発していた。

#### 「自由の声」とその反響

座り込み開始から3度目の金曜日を迎えた2月10日、予断を許さない雰囲気のカイロから、1編のビデオが公開された。冬空のタハリール広場を歩くミュージシャン2人。彼らの口ずさむ歌の歌詞が書かれたプラカードを、広場に集まったさまざまな身なりの人びとが掲げている。大学生風の男女、ひげを蓄えた敬虔そうなムスリム、子どもを連れのお父さん、

集合住宅の屋上に据え付けられたパラボラアンテナが、よきよきと群生するキノコのように見える。ここ10年ほどでなじみになった光景だが、エジプトではケーブルテレビが普及しておらず、各世帯個別で衛星放送を受信している。

革命以来、カイロの街のいたるところで見かけるようになったというグラフィティ・アート。人々の自由な自己表現の場としては各種インディーズ音楽と共通する現象である。



「ブラック・ブロック」を取り上げる新聞。反イスラム主義政権を標榜する新たな革命組織と位置づける論調もあれば、破壊衝動に駆られた無法な若者集団と決めつける論調もある。写真の記事は前者の論調。

などなど。この曲こそ、革命後のエジプトで大ブームを巻き起こした「自由の声」であった。

もう帰らないと言って俺は出てきた  
すべての道に血で文字を書いた  
聞こうとしないヤツにも話を聞かせ  
邪魔するモノはすべて崩れ去った  
夢だけが俺たちの武器だった  
目の前に明日は開けてる  
ずっと前から待っていた  
なかなか見つからない俺たちの居場所  
この国のすべての通りで  
自由の声が呼んでいる

ストレートなメッセージ、かつてのUKロックを思わせるシンプルなメロディー、そしてタハリール広場の今の空気を切り取ったような新鮮な映像が、若者たちの心をつかんだ名曲である。この曲は当初口コミで、後に各種ニュースメディアで全世界に報じられることによって、ユーチューブ上でアクセス数100万件を超すヒット曲となった(youtube.com/watch?v=SJgilsfPKmE)。この

曲を歌った2人のミュージシャンは、カイロキー、ウステルパラドという2つのロックバンドのボーカリストであった。それまでインディーズで活動していた彼らだが、この曲のヒットでそれぞれのバンドも一躍有名になり、特に革命に賛同する若者たちからの支持は絶大なものとなった。

「自由の声」が発表された翌日の2月11日、ムバラク大統領の辞任が発表された。タハリール広場を埋め尽くした群衆は、夜明けまで歓喜の声を上げたが、一夜明けける頃には、それまで息を潜めるようにして成り行きを見守っていた人気歌手たちが、次々に新曲を発表した。

若年層に人気の大衆歌手、ハマード・ヒラルルの場合を見てみよう。彼は革命後いち早くタハリール広場に現れて撮影を行い、「1月25日の殉難者たち」と題する楽曲を制作した。デモに参加して亡くなった若者たちを追悼する内容の歌である。広場にたたずむヒラルルの姿と、激しいデモの様子とが交互に映し出され、あたかもヒラルル自身がデモに参加し

ていたかのようなモンタージュ効果をもたらししている。ヒラルルはこのあと間髪を入れず、「顔を上げろ、エジプト人だろ」と題するエジプトへの応援歌を発表した。アップテンポで祖国愛を歌い上げるこの歌はたちまち人々の支持を集め、この曲名が流行語となるほどであった。

革命直後のこの時期にはヒラルルのみならず、多くの歌手たちが新曲を発表した。その内容は、革命を賞賛するもの、殉難者を悼むもの、そして新たな国づくりのためにエジプト人の団結を訴えるものに大別される。革命フィーバーに沸くエジプトで、革命を貶めるような歌が現れるはずもなく、むしろ革命であらわになった国民の間の亀裂を埋め合わせるため、歌手たちが必死で団結のメッセージを——日本風に言えば「絆」の重要性を——訴えているかのようにも見えた。デモのさなかに体制側についていたディヤブやホスニーも、新たな愛国ソングをリリースしていた。「エジプト人よ、さあ帰ろう」と歌ったタウフィークさえも、

「これでようやく、心の底から歌いたい歌が歌える」と前非を悔いるような歌詞を歌っていたのである。

### 革命に抱きた「多数派」

ムバラクの退任後、軍による暫定統治期間を経て、エジプト初の文民大統領であるムルシー政権が誕生した。しかしこの間も広場の若者たちは、軍政やムルシー政権に対する抗議活動を続けている。デモ側と政権側との衝突は断続的に起こっており、時には死者が出ることもある。

そんな中「アグラベイヤ（アラビア語エジプト方言で「多数派」を意味する）」と言われる国民の多くは、エジプトの景気が向上かず経済状況も良くならないのは、革命の継続を掲げる若者たちのせいだと考え、彼らの抗議デモに批判的になっているとも言われる。たとえばアムル・ムスタファという歌手は、「僕はみんなを見ている」という曲で、「革命でスターになった」テレビの文化人たちを「空虚で中身がない」と揶揄した。革命自体への批判ともとれるが、む



高級ショッピングモール内の大手CDショップで購入したもの。筆者が留学中の2000~2002年によく通っていた街角のカセット屋はすでに店をたたんでしまったと噂に聞いた。カセットからCDへ、そしてインターネットへと、音楽の消費のされ方も変わってきている。



しるメディアに対する痛烈な批判となっているこの曲は、多くのエジプト人の心情を代弁しているのかも知れない。

さらに、ムハンマド・ラヒームという歌手は、「関係者各位に告ぐ」とのメッセージソングを発表したが、そこでは「自分勝手は忘れよう エジプトが一番大事 世界中の目が見ているぞ 祖国が血の海になるのを」と警告する。静かな曲調とららはらに突然「血の海」などという表現が出てくるのはなんだか物騒だが、実際この曲のビデオでは、エジプト名物カイロタワーの前で銃撃戦が繰り広げられる様をCGを駆使して再現しているのである。たしかに近隣国での出来事を考えれば、エジプト人にとって「血の海」の恐怖もあながち絵空事ではないのかも知れない。この曲では、このまま抗議デモを続けていると、リビアやシリアのようになると脅しをかけているのである。

しかし、ここで主張を曲げてまで優先せねばならない「一番大事」な祖国とは、いったい何なのだろうか。広場の革命派の若者たちは単に「自分勝手」を言っているだけなのだろうか。

### そして革命は続く？

「自由の声」のカイロキーは、革命後の6月にリリースした「指導者を求む」で、自分たちが新たな指導者を選ぶことへの強い意

志を歌い込んだ (youtube.com/watch?v=f1NGUMY9v\_l)。

### 指導者を求む

おれたちが法に従わせるような  
信頼を裏切ったらクビにできるような  
そんな指導者を  
容姿は問わない  
年齢も問わない  
宗教も問わない  
人間であることが唯一の条件  
ようにするに  
真の漢が必要なんだ

理想の指導者像を彼らなりの言葉で描写しながら、指導者さえも「法に従わせる」と歯切れが良い。さらには「宗教も問わない」という文言にも注目すべきだろう。その後の選挙で大統領となったムルシーがイスラム主義的な政策を進めると同時に、大統領権限を司法権の上に置こうとしていることを考えれば、この歌詞の持つ意味は深長である。

その後もカイロキーは、タハリール広場に集まる革命青年の側に立ったメッセージを発し続けている。最近出た曲にはこのような一節がある (youtube.com/watch?v=G1HSWRM1Ca8)。

ヤツらは言う、「多数派」が正しいと  
オレも歴史からいろいろと学んだ  
多数派はいつも黙ってきた  
ずっとベテンや偽善を見ているながら

オレは群れの中  
希望もなく歩いている  
抜け出そうともがくオレを  
ヤツらは馬鹿だという  
オレはヤツらとは違う

黙っていても何も変えられない、という主張は理解できる。しかし、沈黙する多数派に対して「オレは違う」という叫びは、そのまま革命青年が世論から孤立している様を示しているようにも見え、アコースティックギター伴奏がいつそう悲しく響くのである。

ようやく訪れたカイロで、革命で何が変わったのかと、ふと自問する。抗議デモは今も続いている。広場に集まる若者の中には、そろいの黒装束で現れる「ブラック・ブロック」なる集団が多くを占めるようになったという。新聞には彼らのことを単なる破壊集団と決めつけて断罪する向きもあった。タクシーの運転手たちは常にラジオに耳をそばだて、通行止めゾーンを慎重に避けて走っていた。今も続く変革の動きに見て見ぬふりしているようにも見えた。

エジプトは今も混乱が続いているように見えるかも知れない。しかし、これは彼らが自由にもものを言うチャンスを手に入れたということなのだ。その表れのひとつが、新しい音楽となって世に出てきている。カイロキーや、それに続くインディーズバンドは、高級住宅街であるザマーレ

ク地区の、今や人気スポットとなったライブハウスに連夜登場している。ヒップホップのアーティストたちも、次々と新たな楽曲をネット上に公開している。既成の価値観に収まらない新しい音楽潮流は、エジプト人が自力で変わる可能性をまだまだ残している証拠ではないだろうか。

さて、マハラガン音楽に話を戻せば、その歌詞は必ずしも革命のメッセージを声高に歌い上げるものではない。しかしその耳新しい曲調には、今までの大衆音楽では飽き足らなくなった若者たちの、新たなニーズが反映されているように思える。件のタクシー運転手にしても、彼ははよりのライブハウスに通うほどの経済力はないものの、毎週のように開かれる親戚や友人の結婚式で曲の情報を仕入れ、新曲のチェックには余念がないという。「マハラガン(祝祭)音楽と呼ばれるゆえんだ。などと話を聞いている間もずっと大音量のカーステレオに、少し耳が痛くなってきた。「悪いけど、曲を変えてくれないか」と頼むと、運転手はこともなげにカーステレオのスイッチをいじり、旧体制派アイドル、ターメル・ホスニーの激甘バラードをかけてきた。選曲の節操のなさが、エジプトの若者のしたたかさをそのまま体現しているように見え、私は苦笑するよりほかなかった。